講演1「文化を基軸とした地方創生への展望」

講師：青柳正規（文化庁長官）

青柳です。今日のテーマである、「文化を基軸とした地方創生の展望」の前に、お話ししたいことがあります。日本にペリー提督が来航した1853年当時、日本の人口は約3200万人で、アメリカの人口は約3000万人と、日本の人口が少し多かった。第2次世界大戦が終わる昭和20年には、約7200万人となり、1853年から1954年の100年間程度で日本は4000万人程度増えたわけです。そしてこの約7200万人が1980年を越えた頃に約1億1000万人になり、戦後の四半世紀でさらに4000万人程度増えました。

現在まで、日本のいろいろな人がさまざまなことを言ってきましたが、結局、人口が増え経済のボリュームが大きくなったことで、それが活力になったのです。

日本は類いまれなものづくりの国であるとよくいわれますが、例えばドイツで言うと、ポルシェに象徴されるように、ものづくりを文化にまで高めているという意味で、メイド・イン・ジャパンがそのレベルまで達しているかは甚だ疑問です。しかし、日本はそのドイツよりも人口の膨張率が高かったため、一時期GNPが世界第2位になりました。

従って、全ての経済活動の基本は、実は人口が多いか少ないかによるものとなります。例えば、今、EU各国のGNPを比べると、見事なほどに各国の人口に正比例しています。つまり、日本はこの人口の増加が基盤にあったおかげで経済発展をしてきたので、人口が減りだした現在では、我々がいかに努力をしてもかつてのような経済発展は絶対に見込めません。このことは、世界中の人口と経済の動態を統計的に見れば厳然たる事実です。そのような中に我々が置かれ始めているために、従来の経済の原理・原則、あるいは経済学者が言うことは、これからほとんど当てはまらなくなると考えていいと思います。

我々の経験から言えるのは、社会というものは常に新しい刺激がないと停滞し淀んでいくということです。そのため、その時々の為政者もイノベーションが必要だと言っています。経済的な拡張・拡大をしなくても、社会刷新のためのイノベーションは必要です。イノベーションがないと社会は停滞し、ある意味で腐敗していく可能性も刻々と大きくなっていってしまいます。

そこで、経済のインパクト以外で何が取り上げられるかというと、それが新しい文化や古い文化をまた新しく再発見して、それによって社会の活性化を図るということが、恐らくこれから日本に残されている、生き残っていくための唯一の方策であると考えています。以上のことを頭に描きながら、これから話したいと思います。

去年、テレビを見ていたら、島根県立隠岐島前高校が取り上げられていました。隠岐諸島は、手前の島前と隠岐の島本島側の島後という、二つのグループに分かれます。そして、この島前高校を中心とした地域おこしを行った人たちの模様が、ドキュメンタリーにまとめられていました。私はその番組を見てすぐに、岩波書店から出版されていたこの地域おこしに関連する本（※）を購入して読みました。その際、お酒を飲んでいたせいもありますが、感動し涙を流しながら読みました。この事例を前振りとして少しお話ししたいと思います。

*（※）山内 道雄、岩本 悠、田中 輝美 (著)「未来を変えた島の学校――隠岐島前発 ふるさと再興への挑戦」（岩波書店、2015年３月）*

この島前では、中之島・西ノ島・知夫里島が中心となる主な三島ですが、その中の中之島の海士町にこの隠岐島前高校があります。この島前は漁業も盛んで、畜産も隠岐の島牛で有名で、大変いいお肉ができる所です。

そのように恵まれた所ではありますが、離島のため人口が非常に少なくなっており、平成20年頃になると60歳以上の高齢者が島民の4割以上となりました。また、最も多いときは年間77人程度いた隠岐島前高校の新入学生が、平成20年にはわずか28人と、生徒が減ってしまいました。

そして、島の子供の55パーセントが、自分たちが住んでいる島の高校ではなく、本土の松江等の高校に進学します。ただし本土の高校に進学すると、いろいろな計算方法があるようですが、最低年間150万円程度が必要になります。その金額を出せる家庭であれば本土の高校に自分の子どもを通わせることができますが、150万円は出せないが、どうにか本土の高校で教育を受けさせたいと思う家庭は、家族ごと本土へ移住してしまうのです。家族ごと移れば、150万円掛かる費用が3分の1から4分の1程度に減り、自分の家から通わせることが可能となります。

そこで、この島外への進学率が高まることが島の住民の人口が減るという悪循環の大きな理由であることを、この中之島の村長や町長たちはしっかりと認識しました。そしてこの高校をどうするかが、島にとって良いサイクル、つまり若者の多くが隠岐島前高校に進学し、そして雇用も進み、その結果島の活性化につながる、と考えるようになります。しかしそのためには、根底から高校の在り方を変えていかなければいけないということで、この海士町の町長たちは自分たちの給料を半分に削りながら、島の外から町おこしの、特に教育を魅力化することのできる人材を呼び込もうとします。

そのとき、岩本悠という、世界を放浪旅行して海外事情にも精通し、また大変やる気のある、素晴らしいリーダー的資質を持っている方が偶然この町に訪れて、そこでこの島前高校を魅力化するというプロジェクトの旗振りをします。

その人たちが書いた本が今日紹介するものですが、その本によると、平成9年のときには77人の新入生がいたにも関わらず、それから約10年強の平成20年には28名まで減ってしまいました。文部科学省の法律にもありますが、先生の数は生徒数に比例するようにされています。そのため急速に先生の数も減り、1学年1学級になってしまいます。

この状況であると、例えば高校卒業後に大学へ進学を希望する人、また、高卒での就職を希望する生徒等、一つの高校の中でのバラエティーを持った教育ができなくなってしまうという危機感を皆さまが持ち、現状を改善しようと行動を開始します。

そのとき既に、島前の地域は、先述のとおり島外への進学や家族ごとの本土移住等、さまざまな形で若者が流出し、後継者が不足になり、既存産業が衰退した結果、活力が低下するという完全な悪循環に陥っていました。これを逆の好循環に転換しなければいけないということで、若者が島の高校に行き定住させるようにすること、また、島出身者だけではなく島外からも中之島に留学してくるような、それだけの魅力がある高校にしていこうと目標を立てます。

地元地域に住むことで誇りと愛着を育んでいき、さらに、地元地域の企業家の精神を皆が持つようにしていく。そして皆が抱いていた田舎には何もないという諦め、あるいは都会のほうがいいという常識、それを徹底的に変えていこう。自分の町を元気にし、新しい仕事を作るために、地元、あるいは島に帰るUターン・Iターンのパターンを一層増やしていくのだということです。そのために、この島前高校の場合には、まず高等学校という教育機関・教育組織を活性化するということに狙いを定めて、平成20年から活動を開始していくわけです。

中之島の海士町の港がある、すぐそばの丘の上に隠岐島前高等学校があります。

そして、高校魅力化プロジェクトというものを、三つの島前の島全体が協力しながら立ち上げていくようになります。まずは、地元の子どもたちを島前高校に進学させて、人口流出を阻止する。そして、生徒が減り1学級だったものを何とか2学級にすることによって、さまざまな教科の教員数を確保する。さらに、高校の中でそれぞれの習熟度に合わせ、多様性を持った教育をすることを図っていくようなことを、この高校魅力化プロジェクトで推し進めていくようになります。

しかし、県立の高等学校というのは、さまざまな条例や文部省の法律によって、ある意味でがんじがらめになっていて、新しいことをやるのはなかなか難しい面があります。そこで公立で高等学校の教育をサポートしようということで、民家の空き家を利用して、隠岐國学習センターという、いわば予備校塾をつくります。そこでは、高校の授業後にも、ゼミナールや体験学習、または勉強を見る等、高校の中での教育の授業のバックアップをしていきます。

しかし、島根県の特殊事情でもありますが、島根県全体では予備校や進学塾は少ない。その代わりに高校教師が大変努力をしています。例えば通常授業は1時限から7時限までですが、1時限の前の0時限や、あるいは授業後に8時限というものを設けることや、土曜補習、高校卒業後の浪人生のために補習科を作って、高校教師たちが浪人生たちを教えるというような、大変素晴らしい努力をしていました。そのため、隠岐國学習センターのような、いわば予備校をつくることには余計に抵抗感がありました。

私は都立の高校に通っていましたが、そこでもこのような補習科があり、卒業生で浪人した人たちは、自分の高校に1クラス程度あるこうした補習科に通って、非常に安い授業料で浪人生活を送り、自分の志望の大学を目指すようになっていました。

しかしながら、私が高校を卒業した頃、東京都には小尾教育長がいて、例えば日比谷や戸山、新宿、都立西といった進学校はつぶしてしまえということで、都内を小さな学区に分けてしまいました。その結果、都立の平均化はできましたが、突出していた進学校は地位を落とし、その代わりに麻布や開成、武蔵といった私立高校が進学校になって、親の負担が大変大きくなりました。このことは典型的な失敗例です。

そうした都立高校に昔あったものが、島根県には伝統として今でもあったということです。従って、これを尊重する必要はあるが、この島前という少し条件の悪い所には、こういった学習塾を公営で運営して高校教育のサポートをするということでありました。

また、幸いなことに、この島前には島外から来た生徒が宿泊できる寮がありました。これを最大限生かしていくことも行われます。

担当課長たちが、島外から高校生に来てもらうために、勧誘のためのさまざまな運動をしに行くのですが、その募集会場に聞きにくる人がほとんどいないようなときもあり、大変な苦労をしたことが本には書かれています。しかしこうした努力が実り、減っていた新入生が平成21年頃からは徐々に増えていくようになります。そして念願だった2クラス運営もできるようになりました。また、最近さまざまな分野で甲子園というものが多く作られていますが、その中で優勝するようなクラブ活動も出始めてきました。

このようにして、例えば平成20年には28人まで減り続けていた新入生が、2012年度には県外からの21人を含めて59人にまで増えました。そして現在は隠岐島前高校全体で160名の在校生となり、この平成20年から始まった高校魅力化プロジェクトは見事に成功します。

しかしながらもちろん課題もあります。１つは、島から出たことのない地元の高校生と、県外からやってきた学生たちの生活環境は全く異なるので、なかなか融合することが難しいということ。２つ目に、そのための現場の先生たちに大変な苦労があるということ。そして、３つ目、少人数教育をうたっていますが、島前高校では先生1人あたり生徒が6人ですけれども、都会等では先生1人あたり4.5人という所もあり、決して傑出した少人数教育ではないということで、クレームが出ることもありました。さらに、公営の学習塾である隠岐國学習センターと高校の先生たちとの軋轢というものが完全に解消したわけではないということもあります。最後に、やはり注目されている高校なので、現役の先生たちのストレスがなかなか大変なものであるというような課題がまだ残っているということです。

この島前という所は非常に伝統文化や伝統芸能等が盛んな所で、例に挙げると、隠岐島前神楽や日吉神社の庭の舞であるなどさまざまなものがあり、こうした催しには島の人々がこぞって参加をし、そのことを大変な誇りにしています。島前高校と他の高校との交流の会等があるときに、島前高校の生徒たちは都会の生徒たちと比べて引っ込みがちですが、一言「じゃあ、お神楽やってごらん」と言うと、素晴らしいお神楽を踊ることができます。そのことにより、彼女や彼たちは都会の人たちに対しても決して負けない文化を持っているということを再認識できたということも、この本には書いてありました。

ここまでで事例紹介を終えて、次に今まで説明したことについて考えてみたいと思います。我々の社会は、さまざまな多様性の組み合わせで、本格的な多様性というものを生み出しているのではないかということです。そして、現在グローバル化が進む中で、あるいはさまざまな事柄が経済優先になった中で、以前よりもはるかにそのことが重要になっています。その多様性を支えているのは、いわゆる生命の多様性、土地の多様性ということを含めての自然の多様性、文化の多様性。そして社会的な多様性というものがあります。

地域文化というのは、例えば東北のある村では米作りであったり、素晴らしい里山であったり、そして昔、寒い夏等のときに、大変な凶作に入ったというようなことを記憶にとどめたお祭り等があります。また昭和50年60年代にみられた、その町の長のような人が出稼ぎのグループを30人～50人束ねて東京へ行って、親分的な仕事をしながら出稼ぎを円滑化するような、地域独特の社会性という意味での多様性等、さまざまなものがあります。こうしたさまざまな多様性をくくってきたものが、それぞれの地域の特色ある多様性です。一つは、そのことをしっかり見分けることが必要です。

そして、地方の活性化をするためには多種多様なものがあります。例えば、先述したような伝統芸能や古典芸能を、子どもの頃から自分のおじいちゃんおばあちゃん、あるいは土地の老人たちに習っていくこと。また、瀬戸内国際芸術祭、あるいは越後の大地の芸術祭や、ラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャポンのような音楽祭等、そうした芸術催事を行うこと。あるいは、お祭り等や、豊岡市のようなコウノトリの放鳥を目的としていた土地の環境整備をすることからの地域おこし。そして、島前における隠岐島前高校を中核とした教育による再生。あるいは、さまざまな農業再生での地域再生ということも行われています。または、マンガ本や子どもたちの絵本を中心としながら、地域の活性化につなげようという多種多様な運動があります。

岩手県奥州市には、酒井里奈さんという女性がいます。農大で発酵学を勉強した後、その研究の延長線上でベンチャー企業のファーメンステーションという会社をつくりました。休耕地になっている多くの田んぼ土地でお米を栽培してもらい、そのお米から非常に質の高いエタノールを作り、それを化粧品やアロマの原料にします。また、その過程で出た残りかすがあります。鶏たちがこのお米からのかすに、非常に食欲を奮い立たせ餌の食いが良くなり、素晴らしい卵ができるということで、再利用も行われています。

CSA(Community Supported Agriculture)により、今、産地直送の農産物というものが都会の家庭にまで入るようになってきて、共同組合等を通じずともさまざま新しいタイプの農業が可能になっています。しかし一方で、こうしたことをさらに大規模に行うためには、コーディネーターのような人たちの不足が既にいわれ始めているということです。さまざまな試みが行われています。

以上のようなものを見ると、先述の隠岐島前高等学校の場合には、島前高校の教育を魅力化することによって、島外からも若者たちを島に呼び込み定住させるということを行っています。そうすると、ちょうどらせん状のように継承者が増えて、そしてさらに産業雇用が創出され、結果として地域の活力が向上します。こうしてらせんが一回転すると、地域の活力が垂直方向に増えます。しかしながら、このような運動体の場合は、常に何らかの刺激を出していかなければ上がっていきません。

今の政府でも、各所での地域おこしの場合にはこうしたインパクトを与え、そして、地域活力が高まるような、垂直方向へのエネルギーの拡大というものを狙ってやっています。しかしながら、これはある一定期間、2年や5年の間には効果はありますが、これを永続化しなければいけません。それをどうやって維持可能なものにしていくのかということが課題です。

その発展と循環ということを考えると、発展形態としては、企業の誘致や農業再生、地場産業の再生、そして島前高校のような教育再生、観光組織の一新、こういうものは、そのときはインパクトがあって飛躍しますが、飛躍した後は下がっていく可能性が十分にあります。その後はそれが安定的・永続的に継続するためにどうすればいいのか、そこで私たちは文化を軸とした地域おこしに持っていこうと考えているわけです。つまり一定数の若者が定着したときに、その人たちがそこに住むことに対して愛着を持ち、そこから誇りを持つようになります。それが広く住民に行き渡ってくることによる地域活力の向上ではなく、穏やかな維持を目指すというところにうまく持っていくことが重要ではないかと思います。

そのためには、産業再生や農業再生ではなく、文化というものを重要視したものに混ぜていく、あるいはそれに転換していくということが必要で、そしてその循環系の中に入ると、住んでいる人たちの絆や連携、連帯、あるいは緩やかな団結というものが増えて、地域の穏やかで永続性のある地域再生につながっていくのではないかと考えています。

さまざまに必要なことはありますが、やはり首長の意欲というものが非常に大切であります。またはそこに住む人たちの過去に対する記憶、あるいは次世代への思いやりといった、時間軸に対する意識です。さらに、岩本悠さんのような地域再生に大変意欲のある粘り強い人物の存在等、こういったものが絡み合うことによって、地域再生が本当に実現されるのではないかと思っています。

ご清聴ありがとうございました。

(了)